

高野保男（UCRC 研究員、甲南女子大ほか非常勤講師）

はじめに

本発表では、メタ哲学の簡単な紹介ののち、哲学の学びや研究を制約していると思われる外在的な条件を重視するタイプのメタ哲学の意義を検討する。外在主義的メタ哲学が問題とするのは、哲学をひとつの学問分野として成立させる本質ではなく、そうした本質の不在であり、本質の不在を前提とした哲学の成立条件である。ソクラテス以来、「本質の探究」を自らの課題としてきたはずの哲学そのものを反本質主義的に規定する試みは我々をいかなる哲学理解へと導くのか。これが本発表を通して我々が共有したい問いとなる。

1. 研究の背景

外在主義的メタ哲学によれば、哲学をひとつの学問分野としてまとめたものになっているのは、明確なひとつの基準ではなく、伝統ないし慣習といった要素である。それは、乱立する様々な方法論や主義主張のそれぞれが哲学と呼ばれている現状を追認することで、ほぼ共通点のない複数の哲学（者）を同じ哲学（者）とみなす根拠として作用する。それに対し、内在主義的で本質主義的なメタ哲学は、特定の研究方法だけを正当化し、それに馴染まない研究は哲学それ自体には属さないと考える。

内在主義的で本質主義的なメタ哲学の典型といえるのが、哲学の定義に対する科学主義（科学的自然主義）的アプローチである。たとえば、ウィリアムソンの提唱する「哲学の哲学」は、哲学は科学の一種であり、ある事実から別の事実への論理的推論による真理の獲得だけが哲学の目的だと主張する。そして、そこで要求されるのは科学的思考だけであり、それ以外の特別な知識や技術は不要とされる。

科学的思考を、あらゆるものを仮説扱いすること、換言すれば、「将来の研究により覆されないことが現時点で確定している知見」などないと考えることと規定したのがラッセルである。この方針に従えば、現時点で最良の科学理論であっても、それを将来にわたって確定済みの「真理」として受けとめることは許されない。

戸田山は、こうした考えが科学の定義それ自体にも当てはまると指摘する。現時点での科学の研究方法や目的は、将来にわたって不変とはかぎらない。ゆえに、科学を特定の定義のもとで理解したうえで科学主義の是非を論じることには意味はない、というのである。ここから、哲学にできるのは、科学の進歩ないし変化を注視し、科学では解決不可能に見える問題について科学と対話し続けることだけだと戸田山は結論する。

以上のような科学主義的哲学観が否定するのは、いわゆる文献学的哲学研究である。両者の関係については、ザウアーの次のような主張が参考になるだろう。哲学の目的を真理の獲得とみなす場合、哲学研究者が過去の哲学のテキスト読解に拘泥する理由は一切なくなる。過去の哲学者の考えが正しいかどうかは、最新の科学理論にその考えが反映されているかによって判断できる

からだ。ゆえに、哲学研究者が学ぶべきは最新の科学の議論であるとザウアーはいう。

科学主義的哲学と文献学的哲学の大きな違いは、たとえば「ロックは物質についてどのように考えたか」といった問いを哲学的とみなすか否かをめぐって顕著なものとなる。科学主義的哲学は、この問いを哲学それ自体には属しないとみなす可能性が高い。哲学研究者はロックの物質概念ではなく、物質そのものを扱うべきであって、そのさい参照先となるのは物質についての科学的研究の歩みだというわけだ。

## 2. 論点

こうした議論に対し、最新の科学論文を参照しながら研究することもロックのテキストを熟読することも同じ哲学の実践なのではないかという見方を尊重しようとするのが、外在主義的メタ哲学といえよう。その提唱者であるプラントは、メタ哲学はもちろん哲学の課題だが、そこには広義の社会学的アプローチが不可欠だと主張する。すなわち、科学主義の正当性（厳密には、科学主義を正当と思うか）は、他の哲学の方法論と同様、哲学における制度的側面や慣習的側面（どのような教育・研究機関に所属しているか、指導を受けた研究者は誰かなど）に依存しており、そのような要素とは無関係ではありえないというのである。この考えは、哲学の（研究）実践の多様性を損なわない理解を促す一方で、ほぼ共通点のない諸実践をなぜ同じ「哲学」というカテゴリーに入れねばならないのかという疑問にもつながるだろう。

## 参考文献

- Plant, B. [2017], 'On the Domain of Metaphilosophy', *Metaphilosophy*, Vol.48(1-2), pp.3-24
- Russell, B. [1917], *Mysticism and Logic and other essays*, George Allen and Unwin（江森巳之助訳、『バートランド・ラッセル著作集 4: 神秘主義と論理』、みすず書房、1959）
- Sauer, H. [2022], 'The End of History', *Inquiry*, pp.1-25
- 戸田山和久 [2013]、*「自然主義批判を批判する」*、安孫子信ほか（編）、『デカルトをめぐる論戦』、京都大学学術出版会
- Williamson, T. [2007], *The Philosophy of Philosophy*, Blackwell Publishing